

親のために冷徹社長と結婚、離婚を切り出したら豹変してぐちゃどろにおまんこ溶かされて分からされた話

サンプル（一部抜粋）

「家を出るな。人前に出るな。お前はただ、そこにいればいい。

寝室は別だ。俺の部屋には勝手に入ってくるな。」

夫・煌さんに命令された事はそれだけ。

結婚2年。幸せとはほど遠い生活。

私は今夜、煌さんに離婚を申し込む。もう…一人で生きていきたいから。

煌さんと結婚したのは、私が生贄として捧げられたからだ。

父が経営する会社が傾き始めて5年…もういつ倒産してもおかしくない状況だった。

それでも会社をなんとか立て直そうと頑張る父を支えたくて、私も母もお給料の大半を父に渡していた。

そんな日常が5年。お金はなかったけれど…それでも家族仲は良かったし、この頃の私はちゃんと幸せだった。

だけどそんなある日、父に頭を下げられた。

「愛理、頼む……！お父さんの為に冴木さんと結婚してくれ！」

って、突然意味の分からない事を言われたんだっけ……。

一体、その冴木さんが誰かも知らない私は唖然としながら、必死で頭を下げる父から話を聞いた。

「昨日急にある人が会社に来てな……」

冴木さんってかなり大手の社長なんだけど……。」

「大手の社長がどうしてお父さんのところに……？」

「それが……扱っている商品は悪くない、契約してもいいって言ってもらえて……。」

ただつぶれかけの会社と契約するメリットはないって……。似た商品なら他の会社にもあるし……。」

「……」

「だからさ……全力で頭を下げてウチから買ってくださいってお願いしたんだよ。」

そしたら、お宅の娘さんを僕にくださるなら契約しますって言われて……。」

「え……？まさか……頷いたの……？」

（中略）

新婚初夜。静まり返ったりビングで、煌さんに声をかけられた。贅沢なシルクのシャツ越しでも分かる、鍛え上げられた大きな身体。振り返った私を、彼はいつもと変わらない冷徹な眼差しで見下ろしていた。

「は、はい……っ」

「お前に命令だ。」

低く、鼓膜を微かに震わせる声音。有無を言わせない絶対的なトップの威圧感に、私はそれだけで息が詰まりそうになる。

「家を出るな。人前に出るな。お前はただ、そこにいればいい」

「……え？」

「寝室は別だ。俺の部屋には勝手に入ってくるな」

完全に私を拒絶し、高い壁を作るような命令。

「外にも出ず……ここにだけいろ、と……？」

「そうだ。お前に自由は与えない。だが、家の中でなら何をしていても構わない」

それだけを淡々と告げると、煌さんは一度も振り返ることなく自分の部屋へと戻っていった。私はこの巨大で豪華な籠の中で、ただ存在するだけの、飼われる人形になってしまった。愛すらもないのに、あの恐ろしい男はなぜ私を指名したのか。

鍵の閉まった彼の寝室を見つめながら、私は冷え切った身体を抱きしめることしかできなかった

た。

（中略）

射すような冷たい眼光に、思わず身体が竦む。

「…明日から、食事は作らなくていい」

「え……？」

喉の奥がキュッと縮んだ。せめてものお礼のつもりだったのに、完璧に拒絶された。

「俺は外で済ませる。お前は、渡してあるカードで好きなものを頼むか、うちの秘書に買い出しを命令すればいい。」

そう淡々と言いたいことだけを告げると、煌さんは私の返事も待たずに自室へと戻っていった。口に合わなかったなら、そう言ってくればいいのに。

差し伸べた手を容赦なく振り払われたような痛みに、私はポツンと残された広い食卓で、小さくため息をこぼした。

（中略）

もう…帰ろう。身の丈にあった温かい世界に。

二年間、私は煌さんに一度も愛してもらえなかった。触れてすらもらえなかった。お互いのためにも、もう終わりにしよう。

この夜、私はついに離婚を切り出す決意を固めた。

(中略)

「…離婚…してください。」

彼の顔は怖くて見れない。ただ私は…自分の希望をゆつくりと口にした。

「……は？」

低い彼の声が響く。感情は分からないけれど…どこか怒りに似た感情を感じる。

「…だから…っ…離婚してください…」

もう一度同じ言葉を紡ぐ。

「……理由は？」

しばらくの沈黙の後、組まれていた彼の足が解かれ、深い溜息とともにそう聞かれた。

「…理由は…好きでもないのに一緒にいるなんて…辛いじゃないですか…」

「……俺は別に構わない。」

お前が俺を好意的に見ていない事くらい、知っている。」

低く淡々と放たれる言葉…。

「私は嫌です…。」

煌さんに愛されてもないのに、こんな大きな家でいつも一人で……

愛してないんだから…解放してください…」

こんな事を言う自分も、みじめで嫌になる。

「…お前、本気で言ってるのか？」

低く怒ったような声色。ドスの効いた声に身体がびくつと縮こまる。

顔をゆつくりとあげると、今まで見たこともないほど彼の眉間には深い皺が刻み込まれていた。圧倒的な威圧感に飲み込まれそうになりながらも…私は自由を欲した。

「っ…本気です…いいじゃないですか…私じゃなくても…」

私は人形には…なれない…」

涙をこらえ、必死で言葉を紡ぐ。

でもその瞬間、煌さんの大きな手が伸びてきて、私の細い手首を骨がきしむほどの力で強く掴み上げた。

(中略)

漏れる息の隙間を縫うように、彼の唇が私に密着し、私の舌を捉えて絡められる。ぞわつと身体の奥に熱気を感じるような、舌の動き…。

「んん…っ、あ…んっ…」

舌を掬われ、なぞられ、静かなリビングにくちゅっ…と淫らな音が響く。

彼に体重をかけられ、ソファの背もたれに頭を押し付けられる。逃げ道は…ない。

「あ…んん…っ」

息すら上手に吸えない。苦しい、頭の中をぐちゃぐちゃにされていくように、ぼーっと視界が

かすみ始める。

「は……あ……んん……」

息の限界が来た時、くちゅつとゆっくりと音が鳴り、彼の唇がようやく私を開放してくれた。

「はあ……なんで……」

必死に酸素を求めながら、涙目で言葉を絞り出す。けれど煌さんからの返事はなく、私の手首を押さえていた大きな手が唐突に離れた。

これで、終わり？

そう安堵したのも束の間、次の瞬間、彼の太い指が私のブラウスの胸元へと伸び、ブチンとボタンが無残に弾け飛ぶ音が響く。そしてそのまま、私のブラウスが真ん中から容赦なく引き裂かれた。

「や……」

「……俺がどれだけお前を欲して、愛しているか。今からその身体に、骨の髄まで分かせてやる。」

（溺愛えっちの全容は製品版にて）